

GLOBAL VOLUNTEER



国内／海外

グローバルボランティア

2022-2023年度活動報告



- 03 WHAT IS "GLOBAL VOLUNTEER" ?**
グローバルボランティアとは
- ACTIVITY REPORTS 活動報告**
- 04** フェアトレードちば フェアトレードちば
2022
- 05** 映像で考える移民難民 千葉大学学生団体FELiceto
2023
- 06** レソト王国 Possible Dreams Foundation
2023
- 08** ベトナム NPO法人ICYE ジャパン
2022・2023
- 10** バングラデシュ NPO法人エクマトラ JAPAN
2023
- COLLABORATING ORGANIZATIONS 協力団体**
- 12** NPO法人多文化フリースクールちば／社会福祉法人さぼうと21／
社会福祉法人日本国際社会事業団
- 13** エクマトラ JAPAN／ICYE／Possible Dreams Foundation
- "GLOBAL VOLUNTEER" ON THE WORLD MAP**
- 14** 世界地図で見るグローバルボランティア
- AFTER ACTION REPORTS**
- 16** 2015・2016年度 深澤弘樹さん
2014年度 青山 聖さん
- 18** 2019年度 中島三月さん
2019年度 北川野々子さん
- PAST RECORDS IN PICTURES**
- 20** 写真で見る過去の記録
- LOOKING BACK OVER THE PAST 10 YEARS**
- 22** 10年を振り返って
- ME AND "GLOBAL VOLUNTEERS"**
- 23** 私とグローバル・ボランティア
- SYMPOSIUM**
- 24** 座談会
- EDITOR'S NOTE**
編集後記

グローバルボランティアとは？

「グローバルボランティア」は、普遍教育の教養展開科目「キャリアを育てる」の一科目で、全学の学生に開かれている。国内外のNPO/NGO、施設、国際機関、フィールド等におけるボランティア活動に従事し、「体験から学ぶ」機会を提供している。

2023年度は、2022年度から継続して実施していたフェアトレードを国内プログラムとして実施しつつも、海外プログラムのみを授業科目として設定し、ベトナム、レソト、バングラデシュの3か国への派遣を実施した。「ボランティアとは、未来ある人同士のプレゼント交換～互いのために利益を生み出す～ものである」をクラス全体の標語とし、12名の学生が参加した。

授業のねらいは、グローバル社会における課題を発見し、多様な視点から現実社会の理解を深め、その課題と向き合っていくために必要とされる考え方、幅広い教養、実践的な知識を身に着けることである。したがって、ボランティア活動の前に目的意識を高める事前学習の受講を必須としており、活動後も、活動から得た経験知や実践知を再び理論的知識と結びつけたり、再構築したりしながら、自らのキャリアに繋げていくための振り返り（事後学習）を行っていく。さらに、経験を言語化し、他者へ伝える力を育てるための報告書の執筆についても単位修得の条件となる。

これまでの受講学生は、ボランティアとは「自分のできること」をするだけに留まらず、「自分のできることを広げる」ことであり、「成果」よりはむしろ「プロセス」を重視した活動であることを発見した。活動は、今まで知らなかった社会を知り、周囲の人々から大きな刺激を受け成長するための「通過点」になると同時に、自分自身が周囲に対して「インフルエンサー」となる機会にもなる。活動後の学生の歩みは一樣ではない。自分の知識や技術の不足を痛感し、自分の専門性について強く意識しながら今後の勉強につなげていこうとする学生もいれば、自分の適性や問題意識の根幹に気がつき、進路を変える学生もいる。

本授業の受講を通し、グローバル社会において自らが取り組むべき課題を定め、自分なりの取り組み方を模索し、今後も向き合っていけるよう、思考し、試行し続ける力をぜひ身につけてほしい。経験を「キャリア」に結びつけるのも、単なる「思い出」として終わらせてしまうのも、自分次第である。

授業のながれ

受講ガイダンス

ボランティア説明会

事前学習

履修必須 ⇒ 1単位

ボランティア活動
50時間程度

+

事後学習

事後学習後、活動報告書の提出 ⇒ 2単位



実施協力団体：フェアトレードちば 工学部2年 Uさん／教育学部3年 Sさん／国際教養学部1年 Tさん



実施協力団体：千葉大学学生団体FELiceto 文学部2年 Sさん

グローバルボランティアを通して～フェアトレードちば～

活動内容

主に、千葉県を中心に活動するNPO法人の「フェアトレードちば」とフェアトレードの啓発活動を行いました。1か月に2回のオンラインミーティングを通してこれからの活動を話し合い、イベントの企画・運営や出店の手伝いとして去年9月にはイオンモール成田でのフェアトレードマーケット、1月の千葉市のフェアトレードマーケットなどといったイベントを行いました。また、SNSを通じたフェアトレードの情報発信や、千葉市や船橋市のフェアトレード商品が購入できるお店紹介などを行いました。また、学生中心の活動としては、千葉大附属小学校の児童に対しフェアトレードのカードゲームを通してフェアトレードの問題に関心をもってもらえるような授業を行ったり、5月にはフェアトレードちばとフェアトレードフェスタで出店を通して啓発活動を行いました。これらの活動を通して多くの人にフェアトレードの問題に興味を持ってもらい、間接的にもフェアではない状況下で貧困に苦しむ人々を助ける手伝いをしました。

体験談

私は、このプログラムの初期は、フェアトレードについてほとんど知らない状態で参加していました。しかし、この活動をきっかけに自分で勉強するだけでなく、フェアトレード商品を扱っている自分より詳しい方々と関わる機会が増えたことによって、多くの知識を得ました。また、普段の生活でもフェアトレード商品が目につくようになるなどの意識の変化もありました。ボランティアという活動は終わりましたが、自分が得た知識や経験を生かして今自分ができることを考え、行動していきたいと思っています。

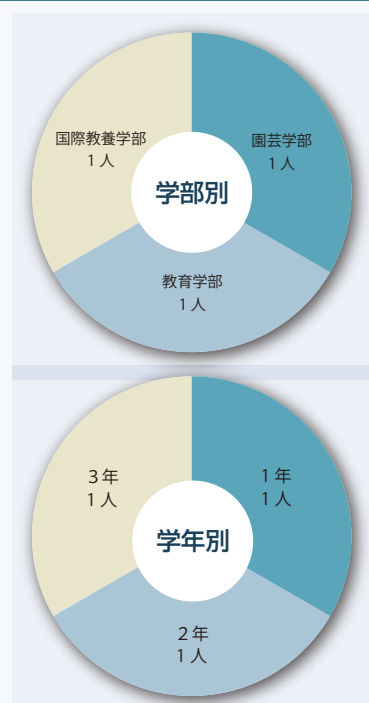
このプログラムでしか学べないこと

多くの人々にとって、普段の生活においてフェアトレード商品を目にする機会は少ないことが現状ですが、このプログラムでは非常に多くのフェアトレード商品を実際に見ることができます。更に、フェアトレードを扱っている方々とお話を通して、商品の背景や販売方法について学ぶことができます。それが魅力だと考えます。

次に参加したいボランティア

今回の活動を通してフェアトレード商品を作っている方々にも非常に関心が生まれました。商品の背景を学ぶ中で、実際に海外に行きバック等の作成方法を教えている方々を知り、フェアトレード商品の販売促進だけでなく、実際に現地に赴き、直接生産者の方々にサポートするボランティアにも参加してみたいと思いました。

履修者内訳



活動内容

『難民映画祭』の開催が、『映像で考える移民難民』のプログラムにおける一大イベントです。映画祭を通し、難民問題について考え、難民問題について捉え直すことを目的としています。このイベントは、学生が主体となって企画運営に携わります。年に一度開催するこの映画祭に向けて、難民問題に関する勉強会、上映映画の選定、SNSやポスター制作を通じた広報活動などの準備を行うほか、映画祭当日のイベント運営、映画に関する事前知識のスライド発表が主な活動内容となっています。2022年の難民映画祭には千葉大学けやき会館に一般来場者も訪れ、映画『ミッドナイトトラベラー』を鑑賞し、感想共有や大学教授によるゲストトークを行いました。2023年の難民映画祭はイングリッシュハウスで開催し、映画『僕の帰る場所』を鑑賞、英語で留学生とも意見交換をすることができました。

体験談

私は文学部に所属しており、学部の授業では難民について扱うことがほとんどないため、学部では学べない分野について学ぶことができる良い機会でした。今年は、特に入管に着目して勉強会を行い、自分の知識の少なさに気づかされました。難民として苦勞を強いられている人々に対して自分自身が直接助けの手を差し伸べることに無力感を抱いていましたが、まずは難民の現状を学び、自分が抱いていた難民に対するイメージを変え、彼らにとって本当に必要なことが何なのか、本質を考えることが最優先であると感じました。その上で何らかのアクションを起こす、というのは他のボランティアに参加する上でも通ずることだと思います。

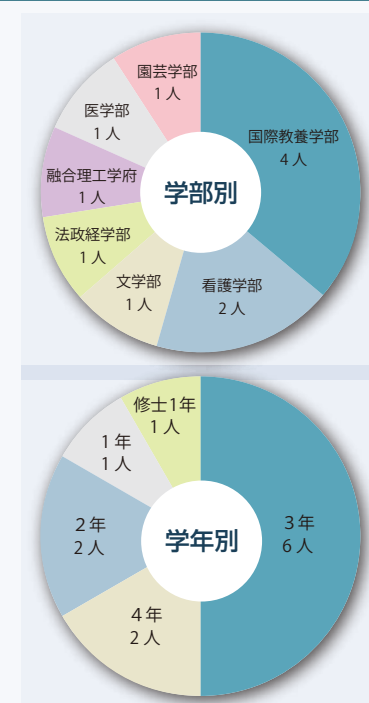
このプログラムでしか学べないこと

座学で難民について学ぶのではなく、学生が自発的に勉強、意見交換をし、実際に『難民映画祭を開催する』ということを通して難民について学ぶという独自性があります。難民問題に詳しい専門家や、当事者の話を聞く機会も豊富です。普段あまり選ばない、難民映画を見る機会が得られ、世界が広がります！

次に参加したいボランティア

国外のボランティアに参加して、現地の学校などで子どもたちと交流してみたい！
国内、国外に関わらず、災害にあった地域の復旧活動のボランティアに参加したい。

履修者内訳



レント王国



人里離れたハ・セカンツィでの7日間。我々にとって、村の人々にとって、新しい経験を。

活動内容

レントの写真家で、教育問題に取り組んでいるジャスティスと共に、ハ・セカンツィという山奥の村でボランティア活動を行いました。具体的には、村の子どもたちと様々なアクティビティをして一緒に過ごしたり、料理や水くみ等の家事を手伝ったりしました。この村の子どもたちは、一番近い学校でも往復で徒歩4時間かかること、家畜の世話や兄弟の世話など家の用事を手伝う必要があること、学校に行くための制服や資金を用意できないこと等が原因で、満足に学校に通うことができないという問題を抱えています。私たち学生はこの問題を直接的に解決することはできませんが、子どもたちに刺激や好奇心を与えるため、カメラを使った活動や日本で準備していったアクティビティ（現地の木材を利用したDIY、pHの変化を利用した液体の色が変わる実験、万華鏡やスライム作り）に取り組みました。また、村の子どもたちにソト語（現地の言葉）を教えてもらったり、滝に連れて行ってもらったり、助けられることも多かったです。

このプログラムでしか学べないこと
次に参加したいボランティア

現地のホストと共に生活し、暮らしに溶け込みながら支援する側される側という壁を越えて活動し現状を学べるのがレント派遣の特徴です。1ヶ月では変革は産めませんが、遠い国の学生が来て活動すること自体が、子供たちに刺激を与えると学びました。継続的支援が重要と感じたため、次の機会にもレントでの教育支援を続けたいです。

レント基礎知識

レント王国は南アに囲まれた山岳国家で、初代国王モショエショエが民を率いこの地に建国しました。山を模した帽子や、山の気候に耐えるためブランケットを羽織る文化が現代でも大切にされており、民族意識の強さを感じられます。高原風景と都市の露店やビルが並ぶ光景が急に切り替わることから発展の途中であると実感できる国です。

子供達との触れ合いを通じて学ぶ障がい者教育。ビジターからボランティアへ。

レントのライフスタイル

都市生活は現代的です。街中に走っている車はタクシーが多く、そのほとんどが中古の日本車（特にFITが人気）です。道路は舗装されていますが所々穴があり、脇に立っている野菜などを売る人が商品を勧めてきます。面白かったのは電気を前払いで買うことです。電気メーターは残り残量を表し、カウントダウンが0に近づくとき焦ります。

ご飯事情

食材は街中のスーパーで大抵揃います。トウモロコシ粉を練り上げたパパという料理が主食で、牛やヤギの肉、ホルモン、野菜などのスパイス煮込みにパパをつけながら食べます。小麦粉とイーストから作る生地を使ったパンのような料理も一般的で、私のおすすめはその生地を揚げたマクワイニャというドーナツのようなスナックです。

活動内容

レント王国の首都maseruから約100km離れたleribeという町にあるSt.Poal School For The Deafというろう学校を訪れました。国内にある2校の内の1校であり、聴覚もしくは知的障がいをもった生徒が寮生活を行いながら学ぶ学校です。幅広い年齢層の生徒が共同生活をしており、5～15歳の生徒はこの学校の中で学び、聴覚障がいの16歳以上の生徒は地元の学校に通い、寝食を寮で行うといった体制でした。手話・筆記・ソト語と英語・教養を、指導員と生徒が密にコミュニケーションをとりながら、ゆっくりと学べる少人数制授業でした。私たちはこの学校に4日間滞在し、授業への参加、授業アイテムの作製、放課後の生徒および指導員との交流、そして参加型アクティビティーを行いました。参加型アクティビティーでは、科学教室、折り紙・切り絵体験を企画し、大部分の生徒が参加した大盛況のイベントを行うことができました。また、指導員との交流を通して、レントの福祉教育の現状や、障がいを持ったひとの社会進出の現状などを学びました。

体験談

4日間の滞在は、ボランティアの意味を考えさせられるのと同じ時に私たちの絆を深めるものになりました。滞在初日、生徒や指導員は笑顔で迎え入れてくれ、不安感や緊張はすぐなくなりました。私たちは、学校から少し離れたビジター用宿舎に泊まりながら、日中は学校に出向く生活を過ごしました。朝夕食用の食材や電気を買いに町に出向くこともあり、3人だけの生活を楽しみながら、日中に感じたことや学んだことを翌日に生かすために長い時間話し合いました。滞後半に行ったアクティビティーでは、生徒たちが食いつくように興味を示してくれ、生徒に、海外の文化を知り、一緒に楽しんだ思い出を提供することができたのではないかと思います。「レント手話をほとんど知らずに来た日本人学生ボランティア」として試されていると感じていた私たちにとって、このイベントを成功させることができたのは、「時間を共にし、互いに知識・経験・思い出を得る」というボランティアの意味を感じることができたものでした。

体験談

私たちが訪れた村は、首都から車で3時間、さらに山道を2時間歩いて登った先にあります。街から遠く離れたこの村の家には、電気はなく、夜になるとランプを灯して過ごします。外に灯りがいないため満点の星空が圧巻でした。また、各家に水道もなく、水源は村の丘の上にある地下水をくみ上げている蛇口のみです。時給自足の生活のため、飼っている家畜のヤギを村の人と協力して捌いていただく経験をさせてもらい、命の大切さを身に染みて感じました。このような昔ながらの生活を送っていますが、A4ノートくらいのサイズのソーラーパネルを使って発電している家もあり、住民の何人かは携帯を持っているという現代的な面もありました。村では主にソト語が使われており、英語を話せない人もいますが、言葉の壁を乗り越え、一緒に遊んだり、焚火を囲ったりしたのは良い思い出です。日本とは全く異なる生活や人との交流の中で多様な価値観に触れ、アフリカに対するイメージや自分たち自身を見つめ直すきっかけになりました。



実施協力団体：NPO法人 ICYEジャパン



教育学部1年Fさん/園芸学部1年Yさん

ベトナム



実施協力団体：NPO法人 ICYEジャパン 法政経学部4年Hさん/工学部2年Oさん/国際教養学部1年Aさん



ベトナムの障がい児・者施設での活動

活動内容

私たちはベトナムのフレンドシップビレッジという障がい者福祉施設に行きました。ここで生活する子供たちはそれぞれの個性を尊重していて、のびのびと過ごしながらも勉強や運動、給食当番などを通して社会性や自主性を学んでいました。そんな彼らのサポートとして私たちが行った活動は主に二つあります。一つは子供たちの勉強のサポートです。彼らは学習能力に合わせたクラスで、各自読み書きや計算の練習、塗り絵などに取り組んでいました。言語の壁があって彼らの理解度を把握するのに苦労しましたが、数え棒を使ったり折り紙をしたりして、一人ひとりと向き合いながら自分たちにできることに励みました。もう一つは体を動かすアクティビティの運営です。他の海外ボランティアとともに何をしたら子供たちみんなが楽しく運動できるか考え実行しました。日本の遊びとして行った「だるまさんがころんだ」をととても喜んでくれて嬉しかったです。明るく活発な子供たちから私たちも多くの学びを得て充実した活動になりました。

このプログラムでしか学べないこと

このプログラムは自由度が高いため、決められたこと以外にも自分で考えて+αの活動ができます。私たちも日本語教室をしたりエコバッグ作りをしたりしました。また他の海外ボランティアとの交流が多くあり、支援活動に関するディスカッションはもちろん、寮生活においても互いの文化を共有できるのが魅力的だなと思います。

次に参加したいボランティア

今回のボランティアを通し、様々な人に出会う喜びとかかわる楽しさを存分に味わい、ボランティアの魅力をより一層強く感じるようになりました。今後は自分が興味のある社会福祉、地域、スポーツ、国際などをキーワードに活動の幅を広げていきたいと考えています。初めての経験を求めて活動していきたいです。

体験談

私たちは海外から集まったボランティアと一緒に留学の日々を過ごしました。活動先では子どもや教育に関する考え方を持ちながら、それらを共有し、どうすれば子どもたちがより楽しく、充実した毎日を送れるかをともに考えながら活動しました。他国からのボランティアのアドリブで子どもたちを楽しませる姿は私たちにはなかった良さであり、学ぶべき姿でした。また私たちもデフチルドレンと積極的にかかわり、一人ひとりと丁寧にかかわる姿は、他国からのボランティアにとって良い刺激になったのではないかと思います。

また今回一番の難点になったのはコミュニケーションです。はじめは他国からのボランティア同士で活発に言葉を交わす姿に圧倒され、なかなか話に入ることができませんでした。しかしもっと話したいという思いが強くあったため、二人の間の会話でも英語を使い、さらに「伝えようとしなければ伝わらない」ということを確認しあい、自分から話しかける態度を心がけるようにしていきました。

活動内容

私たちの活動した施設は、ベトナム戦争で散布された枯葉剤の影響により障がいをもつ子供たちが暮らし、戦争で負傷した人々を治療する目的で作られました。子供たちはとてもフレンドリーで、温かく歓迎してくれました。障がいの程度ごとにクラスに生徒が分けられていて、私は聴覚に障がいを持つ子供たちのクラスで活動していました。多くの先生方は英語が喋れませんが、ベトナム人のボランティアの方々は英語が堪能で、一緒に昼食をとったりとても仲良くなれました。また、海外からのボランティアの方との交流もできました。施設は夏休み期間で基本的に自由時間が多く、彼らが安全に過ごせるように見守ったり、四則混合などの計算を教えたり、折り紙をしたりしました。一日の流れとしては、午前中はクラスごとの活動のあと、庭に出て音楽に合わせてダンスをするのが日課でした。午後は体育館で身体を動かして、ミシンや機織り、手芸などの職業訓練のクラスに行き一緒に作業をしました。

体験談

戸惑いながらも、とても楽しく充実した4週間となりました。活動を開始してから常に自分がどう支援できるかを考えていました。しかし、活動を通じて、自分1人で異国の地でできる支援には限りがあると感じ、事前学習で勉強したようにボランティアは支援する側とされる側の関係ではないことを改めて実感しました。そこで、私はまずオープンマインドで積極的に交流し、この施設ができた背景や子どもたち一人一人の生活や障がいについて話を聞き、勉強しました。活動をしていく中で、精神的なことが原因で突然泣き出す子や拗ねて泣き止まない子など対応に戸惑うこともありましたが、帰国の前には花や手紙をもらい、とても幸せな気持ちになりました。また、同じようにボランティアをする外国の友人ができ、週末には一緒に旅行に行きました！このプログラムはボランティアや国際協力について改めて考えるきっかけとなり、私の人生にとって大きなイベントとなりました。本当にこのプログラムに参加してよかったと思いました。

このプログラムでしか学べないこと

実際の活動を通して、問題点を見つけ出し、その場でできることをする力を身につけることができることはこのプログラムの特徴であると感じました。実際に、渡航前の事前学習で様々な問題について調べた上での活動でしたが、事前学習で出てきた問題とは異なる問題に直面したりと、臨機応変な対応が求められる場面が多くありました。

次に参加したいボランティア

今後は、日本の障がい児教育に関するボランティアに参加してみたいと思っています。今回のグローバルボランティアでの活動で学んだことを活かしつつ、ベトナムの障がい児教育と日本の障がい児教育の相違点や共通点を知りたいと思っています。

バングラデシュ



実施協力団体：NPO法人 エクマットラJAPAN

ダッカにおける活動

活動内容

まず、首都ダッカでは、道ばたで生活しているストリートチルドレンの子供たちと玉入れやリレーなどの運動会をしたり、シェルターで生活しているストリートチルドレンの子供たちとカエルの歌を一緒に歌ったり、アルプス一万尺を教えてあげたり、逆にバングラデシュの遊びを教えてもらったりと遊びの交流を行いました。

また、現地の大学に行き、そこの大学生と日本、バングラデシュの将来について語り合いました。他にも、バングラデシュで活躍されているジェトロやJICA、NGOで働いている日本人の方と食事会の中で貴重なお話をたくさん聞いたり、家庭の食事を家に招いてもらい食べさせていただきました。

自由時間には、ジャムナフーチャーパークという南アジア最大級のショッピングセンターでお土産を買ったり、オールドダッカという旧市街地の町並みを船や馬車に乗りました。インフラはまだ整備されていないのが現状ですが、初めて乗る乗り物など様々な交通手段を使ったのが印象的です。

体験談

まず、今回初めてバングラデシュに行き、衝撃的なことの連続でした。例えば、車間距離の近さや車やバイクの量の多さ、道ばたにゴミ箱が全くなくその辺に捨てるのが当たり前であったりと日本ではあり得ないようなことばかりでした。横断歩道もほぼないなかで、歩行者は道を渡ることすらできないのですが、バングラデシュの人々は日本人に好意をもってってくれていました。どこから来たの？中国人？という質問に対して日本！日本人！と答えると、何を知っているのか、おー日本！いいね！ととても迎え入れてくれます。そもそもバングラデシュが独立する際に日本が初めて認め、今でも鉄道の建設など様々な事業を支援している背景があることが影響しているとのことでした。けれど、特に日本人というだけで写真を撮られたり、写真を撮ってきたり、話しかけてきてくれたりと有名人にでもなったかのような感じでした。しまいには、仕事上の警察官もテレビ電話で家族とつなぎ、僕たちと写真を撮るほどでした。

このプログラムでしか学べないこと

一番は、考える機会の少ない貧困やストリートチルドレン、教育の問題などだと考えます。こういった問題に必ず直面します。ただ、こういった経験が自分の人生や価値観を大きく変えるきっかけになったし、自分の生活を俯瞰し、“幸せ”や“当たり前”について考え直す良い機会になりました。

次に参加したいボランティア

僕は今回、大学の授業では扱われない世界の教育事情を知るためにバングラデシュに行き、教育の大切さや教育環境の違いについて学びました。そこで今度は、別の国へ教育ボランティアへ行き、教育のあるべき姿であったり、教育の意義についてさらに考えを深めたいと強く望みます。

動画の説明

様々な視点からバングラデシュという国や今回の活動で学んだことについて動画を制作しました。そして、それぞれが肌で感じ、見てきたこと、考えたことが皆さんに鮮明に伝わるように工夫しました。今最もあつい国バングラデシュに興味を持った方、ボランティアしてみたいなと思っている方、全く知らない方ぜひ見てみてください！

体験談

今僕は教員を目指していて、教員のたまごとして今回の経験を通して、教育の大切さを強く感じました。ストリートチルドレンの子供たちは親が早くになくなってしまったり、お金の面から捨てられてしまったりと様々な理由で、道端で物乞いをしながらその日を生きるために一生懸命稼いでいました。そのような中では学校へ行く余裕、お金などありません。ですが、やはり教育は誰もが平等に受けられるべきで、集団生活や社会の常識、ルールなど将来生活していく上で必要不可欠なものを学ぶ場だと改めて感じました。そして、彼らはそんな貧しい環境のなかでもエネルギーで、あの明るい未来への希望をもった綺麗な瞳は忘れられません。僕はボランティアとして彼らに何かできることをするために行ったのですが、多くのことを教えてもらいました。自分は何を与えられたのか確信を持てなかったのですが、彼らは日本のことに興味を持ってくれ、自分を与えられたことも少しはあるのではないかと感じ、ボランティアは片方が何かを与えたり、支援するものではなく、互いに刺激し、与えあうものだと感じました。



<https://youtu.be/oK9shrCOWY4?si=uhKAkoBSSFIEY47m>

動画による“海外編 GLOBAL VOLUNTEER 紹介（バングラデシュ）”



国際教養学部3年 Oさん/教育学部2年 Kさん/文学部2年 Yさん/国際教養学部2年 Tさん/国際教養学部1年 Kさん/国際教養学部1年 Hさん

農村での活動

活動内容

首都ダッカを離れ、アカデミーと呼ばれるダッカ周辺で学ぶ意欲のあるストリートチルドレンの子供たちのために作られた学校のような教育施設を訪れました。施設では、日本から持って行った折り紙やシャボン玉、けん玉などを教えてあげたり、彼らがはまっている卓球やサッカー、キャッチボールなどに混ざって負けじと遊び交流してきました。とても短い期間でも言語の壁など簡単に越えられてしまうことを痛感しました。

また、ユニクロなどのファストファッション製品などを低賃金の中、手作業で作るガーマンツ工場を訪問したり、ハンディークラフトの制作現場を訪問したりして、表には見えない労働者たちが働く労働環境がどのような状況にあるのかを肌で感じてきました。他にも、UBININGと呼ばれる無農薬で自給自足をしながら生活している団体を訪問し、日本の自給率の低さについて考えさせられました。そして、吟遊詩人パウルの鑑賞や少数民族ガロとの交流などの本当に貴重な体験もさせてもらいました。



団体概要と主な活動内容

本スクールは、2014年に設立しました。その目的は、母国や日本の中学校を卒業しているにもかかわらず、日本語を学ぶ機会が十分ではないために進学できなかった外国につながる生徒を、高校につなげようというものです。これまで180名ほどの生徒が参加し、帰国や転居した

ものの以外の殆どの生徒を実際に高校に進学させています。

ただ、1年間の授業で入試に合格でき、高校の授業についていける日本語を身に着けるのは大変です。そのため、年間約220日、1日4時間の授業を行っています。また、親の都合による来日とバラバラの来日時期、アルバイトの必要がある家庭などさまざまな困難を彼らは抱えています。そのため、細かいところまで気を配れるように少人数のクラスを作り、生徒に寄り添って指導しています。

メッセージ

本スクールの問題点の一つは、「閉鎖集団」になるということです。生徒たちは仲間内ですぐに仲良くなりますが、それが日本人や日本社会とのつながりとはならないのです。学生の皆さんに継続的な日本語学習を指導してもらうことは難しいとは思いますが、閉鎖的になる生徒たちへ日本人や日本社会との「窓口」になって欲しいと思います。この間、千葉大学生と行っている「佐倉ツアー」などはその典型だと思っています。



団体概要と主な活動内容

エクマットラとはベンガル語で「皆が共有する一本の線」という意味で、バングラデシュでストリートチルドレンの支援を行っている団体です。

青空教室などのフィールド活動や、路上でのレスキュー活動、エクマットラアカデミーの運営など、子どもたちが教育に触れる機会の提供から社会の中で自立するまで、長期的なビジョンを

持ち現地で活動を行っています。

そうした路上生活をする貧困層の子どもたちへの直接的な支援と共に、富裕層の人々にも自国の社会問題を自分自身の問題として認識してもらうために、映像制作による啓発活動も行っています。

バングラデシュに存在する気の遠くなるような格差を超えて、子どもたちが手を伸ばせばチャンスをつかむことができ、人々が自発的に路上の子どもに手を差し伸べ、皆が手を取り合える世界。

「エクマットラ」は、そんな社会の実現を目指し名付けられました。

メッセージ

20年という活動の中で、創立当時小さな子どもだった子たちが、エクマットラに来てチャンスを掴み、努力をし、大学生となり、立派に仕事をして社会に羽ばたいていく姿を見てきました。

エクマットラの活動は、生まれた環境に関わらず全ての子どもたちが機会を得られれば、愛情と教育により成長し、大逆転できることを証明しています。

私たちは彼らの可能性を本気で信じ、次世代のリーダーとなり得る「心のエリート」を育てています。

あなたも私たちと一緒に可能性に満ち溢れた子どもの未来と一緒に創っていきませんか。



団体概要と主な活動内容

さぼうと21は、日本に暮らす難民、日系定住者など、定住外国人の方々の自立を、主に教育の側面から支援する活動を続けています。活動の柱は、「就学支援金の支給」「相談対応」「学習支援」の3つの事業です。中でも「学習支援」の活動は、150名以上のボランティアの方々の「じんりょく（尽力・人力）」なしでは成り立たない事業と言えます。東京、千葉、計4か

所での対面型学習支援、連日開催されるオンライン型学習支援、個別のニーズにスポットで対応していくアウトリーチ（出張）型学習支援を組み合わせ、「一人も取り残さない」を目標に掲げて活動を継続しています。コロナ禍にありながら、参加者が減ることはなく、2022年には、ロヒンギャ難民二世の小中学生を対象とした「オンライン上の学校」もスタートしました。日本語、学校教科の補習にとどまらず、ピアノや簿記など、学習者のニーズと求めに広く対応しています。

「自由な学び舎」がそこにあります。

メッセージ

「困ったときはお互いさま」が、さぼうと21の活動の合言葉です。困っている人がいれば、何か自分にもできないかと考え、そして行動する。難民等への学習支援という活動は、多様な人々とやりとりを重ねる中で互いに理解し合えていく楽しさを知り、「わかった!」ときに思わずハイタッチしたくなるような喜びを分かち合える、そんな活動です。そして、参加するわたしたちは、目の前の子どもたち、大人たちから世界を知り、読み解き、自身と向き合い、見つめ直すきっかけをもらっています。



団体概要と主な活動内容

ICYE (International Cultural Youth Exchange) は1949年終戦直後、アメリカとドイツの間で、青年の交換事業・奉仕活動を通して互いの文化を学び、理解を深め合うことで平和を構築していくというビジョンのもと発足しました。今日まで70年以上続く歴史ある団体です。

国際ワークキャンプ（10日～）、サンフランシスコ低所得者支援・教育・福祉、ベトナム児童福祉、インドネシア日本語教育プログラム（2-3週間～）、中南米・アフリカ・アジア・欧州世界約20か国での中期ボランティア（3-4週以上）、世界約30か国での長期ボランティア（6ヶ月以上）そして、来日事業を世界各国のパートナー団体と共に運営しています。世界中の青年の国際的な学びのプラットフォームを担っています。

メッセージ

活動先での「温度」「匂い」「音」街を歩きながら、現地の人との会話、生活の中で感じる「雰囲気」「色」「質感」それらは異文化理解において重要な側面を持っています。どんなに巧みな言葉でも、現地で感じる、言葉にならないほどの多様で大きな世界を説明することはできません。学生の皆様には是非それを感じて欲しいと思います。皆さんの中の「世界に挑戦したい!」気持ちをICYEスタッフ一同でサポートいたします。



団体概要と主な活動内容

社会福祉法人日本国際社会事業団（ISSJ）は、日本に暮らす外国籍の人々、とりわけ女性や子どもが自信と希望をもって日本社会で生きていけるよう、ソーシャルワークを実践しています。

60年以上にわたり、時代や社会の変化に応じて、その内容を少しずつ変容させながらも、複数の国・文化・言語にまたがって生きる人々のニーズに寄り添い、様々な活動を展開し続けてきました。現在の主な活動は、移住者家族への生活支援とコミュニティのエンパワメント、子どもの国籍取得支援、養子縁組とルーツ探し支援です。

2017年より、移住者コミュニティ支援の一環として「ムスリム女性のための日本語教室」をいくつかの地域で実施しています。コロナ禍でも、女性たちが孤立を深めることのないよう、工夫を重ねながら活動を続けています。

メッセージ

近年、日本国内でも、色とりどりのスカーフに身を包んだムスリム女性の姿を目にすることが増えました。それでも、彼女たち一人ひとりがどんな思いを抱きながら、どんな風に、文化も習慣も言語も異なる日本で生活しているかを知る機会は多くありません。

大学生には、日本語教室や課外活動への参加を通して、彼女たちの生活を知り、その想いやユニークさを感じていただければと思っています。



団体概要と主な活動内容

レソト王国のハ・セカンツィという小さな村で村の人々の生活向上のためにコミュニティベースで活動を行っています。これまでにスキルトレーニングやリテラシープロジェクト、ミシンのプロジェクト等を通して村の人々の経済状況や教育環境の向上やエンパワメント

を実現させてきました。現在もそれらを行いながら、2021年から新しくカメラを使った教育活動や村の中に施設を建設するプロジェクトも始めています。本団体のメンバーのみで活動を行うのではなく、村の人々と対話をし、協力しながら活動を行っています。本プログラムは基本的にレソトの首都と村を行き来しながら活動を行います。首都では行政の方とミーティングを行うこともあれば、村で撮影した動画を編集したりすることもあります。村では村の生活を村人から教えてもらいながら活動します。

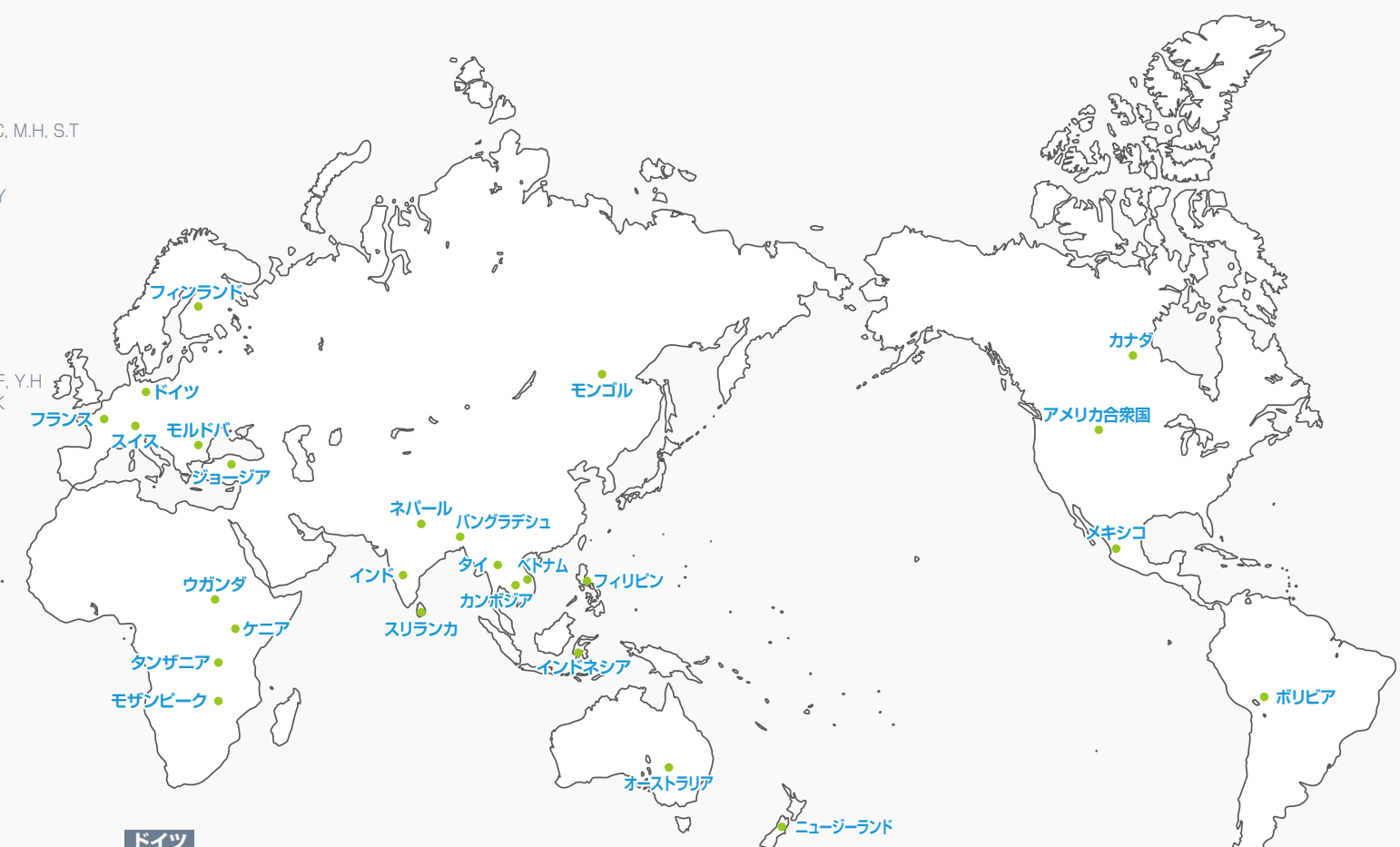
メッセージ

本プログラムは始まったばかりの新しいもので、まだ駆け出しのプログラムに参加し、コミュニティの人々と対話を繰り返しながら行っていくのが特徴です。だからこそ現地の人々により寄り添った活動ができるのに加え、参加者の皆さんが現地でやってみたくと思ったことを新しいプロジェクトとして実行できるかもしれません。想定外のことが起きることもありますが、それも含めて多くのことに挑戦したい方にオススメのプログラムです。



世界地図で見るグローバルボランティア

PAST PARTICIPANTS
過去の海外プログラム参加者



アメリカ		
2014	CIEE	Y.S
2014	JPRN	M.T
2014	JPRN	H.E
2015	CIEE	Y.S
2015	JPRN	K.S, K.C, M.H, S.T
2015	CIEE	M.N
2016	CIEE	S.I
2016	JPRN	M.T, S.Y
2016	CIEE	H.F
2017	CIEE	H
2017	JPRN	T
インド		
2014	ICYE	M.G
インドネシア		
2015	NICE	M.S, K.F, Y.H
2016	NICE	K.U, K.K
2016	NICE	Y.H
2017	Gakuvo	K
2018	Gakuvo	K
2019	ICYE	Y
ウガンダ		
2018	ICYE	M
2018	NICE	B
2019	ICYE	K
2020	ICYE	K
オーストラリア		
2014	CIEE	R.Y
2015	CIEE	M.Y
2017	CIEE	S
2017	CIEE	S
2018	CIEE	K
2018	CIEE	U
2018	NICE	M
カナダ		
2014	CIEE	A.T
カンボジア		
2017	NICE	H
2017	NICE	N
グルジア		
2014	NICE	Y.T
ケニア		
2019	NICE	M
スイス		
2019	NICE	N
スリランカ		
2014	good!	T.N
2014	good!	S.A
2015	good!	Y.I, S.T, H.T
2016	good!	H.I, A.O, M.S, Y.S, S.R
2017	good!	O
2018	good!	H
タイ		
2014	NICE	S.M
2016	NICE	Y.A, Y.N, R.K
タンザニア		
2018	NICE	W

ドイツ		
2015	CIEE	A.A
2016	NICE	T.T
2019	NICE	K
ニュージーランド		
2016	CIEE	K.N
2019	CIEE	M
ネパール		
2014	ICYE	Y.S
バングラデシュ		
2023	エクマッタ	O
2023	エクマッタ	K
2023	エクマッタ	Y
2023	エクマッタ	T
2023	エクマッタ	K
2023	エクマッタ	H
フィリピン		
2014	NICE	T.T
2014	NICE	Y.M
2014	NICE	A.A
2017	ICYE	N
2018	ICYE	M
2019	NICE	U
2019	ハロハロ×DAWN	U
2020	セブンスピリット	M
2022	ICYE	T

フィンランド		
2016	NICE	E.F
フランス		
2018	NICE	K
ベトナム		
2013	ICYE	M.H
2022	ICYE	H
2022	ICYE	H
2022	ICYE	S
2022	ICYE	S
2022	ICYE	S
2022 (春)	ICYE	Y
2022	ICYE	F
2023	ICYE	H
2023	ICYE	O
2023	ICYE	A
ボリビア		
2016	NICE	R.I
メキシコ		
2015	ICYE	N.I
モザンビーク		
2018	NICE	O

モルドバ		
2019	NICE	A
モンゴル		
2014	NICE	A.O
2017	good!	I
レソト		
2023	Possible Dreams Foundation	M
2023	Possible Dreams Foundation	S
2023	Possible Dreams Foundation	S

国内ボランティア参加一覧

ICYE・来日生サポート		多文化フリースクールちば		ヒューマンライツ・ナウ	
2015	A.T	2016	T.I	2016	C.T
2015	Y.M	2016	A.Y	フェアトレードちば	
2015	Y.M	2016	T.Y	2014	U.S
2016	T.H	2016	Y.H	2014	R.K
2016	M.K	2016	K.S	2014	M.F
2017	R.W	2017	H.K	2015	S.S
2017	H.N	2017	Y.T	2015	T.N
2018	N.M	2018	H.M	2015	T.T
2018	N.H	2018	E.F	2016	M.O
2019	M.Y	2020	H.Y	2016	N.T
NICE ワークキャンプ		2020	Y.O	2016	M.O
2019	S.C	2020	M.O	2016	Y.I
イクレイ日本		2020	A.T	2016	A.O
2014	A.M	2020	K.T	2016	Y.S
2015	K.I	2020	Y.S	2017	S.K
2016	Y.M	2020	A.Y	2018	M.N
移民コミュニティとの交流		2020	W.O	2019	Y.T
2020	Y.I	2021	H.O	2019	J.M
2020	Y.M	2021	Y.H	2020	S.S
2020	E.M	2021	S.M	2020	H.S
2020	A.K	2021	F.N	2020	Y.O
2020	E.I	2021	Y.K	2020	M.A
2020	R.H	徳之島虹の会		2020	M.M
2021	M.S	2018	K.T	2020	A.F
2021	A.K	成田国際空港		2020	R.O
2021	I.S	2013	Y.A	2020	Y.S
2021	M.T	2013	U.T	2020	M.K
2022	M.T	2014	H.M	2020	M.H
2022	M.N	2014	S.Y	2020	R.M
2022	K.O	2014	C.T	2020	N.O
2022	M.Y	2014	K.K	2021	R.O
映像で考える移民難民		2014	Y.N	2021	H.Y
2020	N.S	2014	Y.N	2021	Y.M
2020	Y.M	2014	M.F	2021	F.S
2021	A.I	2014	R.I	2021	Y.T
2021	K.O	2014	C.A	2021	M.N
2021	K.I	2014	H.Y	2021	M.K
2021	Y.I	2015	N.K	2021	A.Y
2022	H.N	2015	S.K	2021	N.I
2022	C.N	2015	H.F	2021	A.S
2022	M.S	2015	Y.T	2021	F.W
2022	H.S	2015	K.N	2021	N.A
劇団あけぼのプロジェクト		2015	Y.S	2022	Y.U
2015	R.K	2015	M.S	2022	Y.S
2015	T.U	2016	K.I	2022	R.T
2015	W.	2016	A.K	福島子どもカプロジェクト	
2017	S.T	2016	M.N	2014	A.T
さほうと21		2016	M.F	2014	N.S
2021	T.A	2016	M.Y	2014	S.C
2021	M.O	2016	S.N	2014	R.F
2021	R.N	2016	M.K	2014	R.I
2022	M.U	2016	N.T	2014	D.H
2022	A.C	2016	A.O	我孫子市国際交流協会	
2022	S.I	2016	N.I	2013	H.L
2022	N.F	2017	M.H	2014	M.M
2022	S.S	2017	H.O	2014	K.F
2022	S.K	2017	Y.O	2014	S.I
2022	Y.S	2017	K.N	2015	M.N
千葉市立高浜第一小学校		2018	A.K	2015	H.I
2018	H.K	2018	S.S	難民支援ボランティア	
2018	M.Y	2018	M.Y	2017	A.S
2018	K.I	2018	K.I	2017	M.T
2018	K.K	2018	K.K	2018	M.W
2019	Y.Y	2019	Y.Y	2019	M.N
2019	A.H	2019	A.H		
2019	K.K	2019	K.K		
2019	S.S	2019	S.S		
2019	M.N	2019	M.N		
2019	M.A	2019	M.A		
2019	R.K	2019	R.K		

自分の進路を方向づけた貴重な経験

きっかけ

私は、大学入学当初から、「4年間のうちに海外留学の経験をしたい」と考えていました。また、そのためには英語能力を向上させ、海外の方と関わる経験を積んでいきたいと思っていました。さまざまなプログラムの情報を調べていたところ、グローバルボランティアではさまざまなプログラムを展開しており、自らの興味関心に応じて選べるということを知りました。自らの目標を達成しながら、社会貢献もできるという点、そして、海外プログラムでは目的が語学留学ではないということに惹かれました。1年次には国内プログラム、2年次にはかねてからの念願であった海外プログラムへの参加を決めました。

参加

1年次には、成田国際空港での案内ボランティアに参加しました。空港利用者の方とのやりとりでは、外国語を使用することが求められることも多く、自信がない中でも意思疎通がとれた時には嬉しかったことを覚えています。

2年次には、CIEEの教師アシスタントに参加し、3週間、アメリカ合衆国・ユタ州の小学校で先生のお手伝いをしたり、日本文化についての授業をしたり、子どもたちとふれ合ったりしました。周囲の状況を見て、的確に行動することを学びました。教育実習のようなプログラムを経験して、ボランティアの意義や教育実践について自分なりに考えるきっかけにもなりました。

参加後

特に2年次の教師アシスタントは、今後の進路を決めるうえでの重要な出来事だったと思います。アメリカでの経験が教職を志すきっかけになりました。2度の教育実習以外にも、2年次の春休みには多文化フリースクールちばの歴博ツアーに参加したり、3・4年次には通信制高校のチューター活動に参加したりすることで、ボランティアという立場を通して教育について学びました。2019年から現在にかけて、茨城県内の私立高等学校教諭として勤務していますが、大学時代に取り組んだことの一つひとつが、今、これほど活かしていることに驚きを感じています。



※学部・学科：教育学部 中学校教員養成課程 英語科教育分野
現在の「教育学部 学校教員養成課程 英語教育コース」のことです。

TURNING POINT 1

1年 夏 成田国際空港

英語運用能力を身につけたい、海外の方と関わる機会をもちたい、という目的をもって参加しました。多くの方が利用する場所で、多い日で1日100人のお客様の質問に答えることもありました。目的に挙げた2つの他にも、接客スキルや、目標を立てて取り組むことの大切さを学びました。

TURNING POINT 2

2年 夏 CIEE教師アシスタント

初めて1人で飛行機に乗り、アメリカまで移動するという経験から始まりました。常に自分にできることを探したり、オリジナル授業を成功させたりすることができました。ボランティアの立場を通して、教育について深く学び、その後の学習につながる経験ができました。

TURNING POINT 3

2年 春 多文化フリースクールちば

海外にルーツをもつ子どもが通っている「多文化フリースクールちば」の存在を知り、「歴博ツアー」に学生ボランティアとして参加しました。現在は高校教員としてさまざまな背景をもつ子どもたちを教えています。その原点はこの日だったのではないかと思います。

TURNING POINT 4

現在 私立高等学校英語科教諭

昨年度まで担任していたクラスでは、海外にルーツをもつ子どもが多く在籍しており、大学時代から取り組んできたことが大いに活かされています。今年度は、佐々木先生のご協力を得ながら、高校生を多文化フリースクールちばに連れていき、ボランティア企画を実現させました。

深澤弘樹さん

PROFILE

参加時期：①2015年度・1年生

②2016年度・2年生

プログラム：①成田国際空港

②CIEE教師アシスタント

自分の想像をはるかに超えていた、世界のおもしろさ



きっかけ

海外に興味を持ったのは、高校生の時にニュースで見た「アラブの春」がきっかけでした。

民衆の力が実際に時の政権を倒していく報道を目の当たりにして、「今世界では何が起きているのだろうか？」とテレビに釘付けになったのを覚えています。大学生になったら絶対に海外に行って、世界の現状を知りたいと思っていました。

ところが実際大学生になってみると、授業・バイト・サークルに忙しい毎日。海外と関わることなんてすっかり頭の隅に追いやられてしまっていました。そんなある日、授業でたまたま隣に座った女の子から、夏休みにフィリピンに行き、ボランティアをするのだ、という話を聞きました。同じ一年生なのに行動を始めることに驚いたのと同時に、負けたくない気持ちでグローバルを紹介してもらい、初めてのボランティアに挑戦することにしました。

参加

私は2週間スリランカの貧しい村で井戸を掘る「ワークキャンプ」というボランティアに参加しました。日本人参加者が20人、1人1家庭でホームステイをしながら、日中は皆で集まって井戸掘り作業を進めていきます。私がお世話になったのは、ジャングルに囲まれた村の、土壁の素朴な家。日の出とともに起き、日中は井戸掘り、夕方は村人と一緒に川で水浴びをし、ろうそくの明かりで夕ご飯を食べて寝る。初めは言葉も分からず、コミュニケーションも取れなかった村人とも、生活していくうちに腹の底から笑いあえる関係になっていきました。

参加前、「発展途上国」というのは、貧しくて可哀そうな人たちが暮らすイメージでした。しかし、実際に訪れたその村は、物質的には豊かとはいえないけれど、村人たちは助け合いながら、美しい自然と共に、とても幸せそうに暮らしていました。「発展途上国」を支援するつもりだった私にとって、いろんな意味で衝撃の2週間でした。

参加後

実際に訪れた異国の地で、まだまだ知らないことばかりなのだと思感した私は、日本や世界のことをもっと知りたいと思うようになりました。何度も海外のプログラムに参加し、国内でも震災後の東北や、茨城の水害支援、各地の農業や雪かきなど、数多くのボランティアに参加しました。それは、グローバルに参加して、自分で実際に現地へ足を運び、そこで何を感じるかがとても大切だということに気づいたからだと思います。

様々な経験を経た私は、自分だけでなく他の人にもこういう世界に飛び込んでほしいと思うようになりました。そんな思いで、現在はグローバルで出会ったNPO法人グッドという団体で勤務しながら、国内外のプログラムを担当しています。参加してくれた人が、新しい価値観を持って帰ってもらえるようにと願いながら、活動を続けています。

青山 聖さん

PROFILE

参加時期：2014年度・1年生

プログラム：NPO法人グッド・スリランカ

TURNING POINT 1

1年 夏 グローバルでスリランカのプログラムに参加
初めての海外ボランティアに参加。スリランカの小さな村で、ホームステイをしながら道路作りをする。

TURNING POINT 2

1年 冬～ NPO法人グッドで学生インターンをする
東京の事務所に週1で通うようになる。事務所の運営の手伝いや海外ボランティアプログラムのサポートをする。一度きりで終わりにせず、継続的にボランティアに関わることで、様々な人と出会ったり、別のボランティアに参加したりするきっかけとなった。

TURNING POINT 3

2年 夏 2度目のスリランカキャンプに参加する
もう一度同じ国で活動することで、1回目と比較して物事を見ることができた。同時期にタイのプログラムにも参加。世界には色々な生き方をしている人たちがいるのを肌で知る。

TURNING POINT 4

2年 夏～3年 冬 全国学生ボランティアフォーラムの実行委員をする
全国からボランティアに興味のある学生が集まるイベントの実行委員を務めた。企画を進めるために他の団体のボランティアにいくつも参加。団体ごと、地域ごとに異なる特色を知っていくことが面白かった。

2018年 卒業～

NPO法人グッドに就職
学生時代に様々な場所を訪れて、新しい挑戦をするおもしろさを知り、今度は自分がそういうきっかけを作りたいと思うようになる。2018年に新卒でNPO法人グッドに就職。今は国内外のプログラムで引率をしている。

きっかけ

もともと国際協力に興味があり、ボランティアの本質を知りたいという思いから一年次にグローバルボランティア事前学習を受講しました。実践として多くのボランティアがあるこの講義で映画祭のプログラムに参加する決め手となったのは、国内の難民の方々とつながりを持つFELicetoという学生団体での活動経験です。私はこの学生団体で多くの難民、または難民の認定を待つ方々から話を伺う機会がありました。時に耳を疑いたくなるような母国での苦しい経験を聞くと同時に、日本社会から存在を認められていないことが一番つらいと多くの方が感じていることを知り、それならばより多くの日本人に彼らの状況を知ってもらうことが問題解決の糸口になるのではと考え参加しました。

参加

一年次から団体で活動していたこともあり、本映画祭では運営のコアメンバーとして司会を務めました。チームを引っ張る立場というものを経験したことがない私にとって大きな挑戦であり、コンセプトのすり合わせ、会場や機材の確保、告知と集客、外部講師・パネルディスカッションゲスト・UNHCRとのやり取りなどすべてのプロセスに関わる中で、一つの大きなイベントを作ることが想像以上に大変だと知りました。その分収穫と達成感も大きく、アンケートで「今まで存在を知らなかったがイベントを通して難民をもっと知りたいと思った」という感想や後日新聞に取り上げていただくなど、学生の力で少しでも社会の認識を変えることができるのだという自信に繋がったことを覚えています。

参加後

本ボランティアで「難民」という切り口から自分と違う立場の人の生き様を学んだことで、その他多くの社会課題が他人事ではないと感じるようになりました。そこから外国人と積極的に交流するようになり、最近コンゴ難民として来日した友人に久しぶりに会った際には、彼が私のことを5年前日本に来て初めてできた友達なんだ、と流暢な日本語でほかの日本人に紹介してくれ喜びと感動を覚えました。難民問題だけでなく、世の中には家庭や職場環境、ジェンダー、人種や宗教を取り巻く様々な悩みや課題があり、それぞれの人間がそれぞれの人生にストーリーを持っています。私は、誰もがどのようなきっかけであれ、世の中の困難を抱え孤立している人々と結びつくことで、生きることの辛さを生きる喜びに変えることができると信じています。そして、グローバルはみなさんが世界を舞台にその力を発揮するチャンスを作ってくれるものだ、自身の経験を以てお伝えしたいです。



中島三月さん

TURNING POINT 1

2010年 夏

初めての海外、ベトナム家族旅行。同い年にもかかわらず路上で働いている子どもたちの姿に衝撃を受ける。当時担任だった先生が少年兵やストリートチルドレン、JICA協力隊の存在を教えてくださいました。そこから国際協力を志す道が開けた。

TURNING POINT 2

2018年 春

教育を通じた国際社会への貢献を目指し教育学部小学校課程教育学選修へ進学、同時に国際日本学と幼児教育も専攻。友人の紹介によりFELicetoの一員として国内の多様な背景を持つ外国人と出会う機会を得る。

TURNING POINT 3

2019年 夏

教授とJICA海外協力隊の方の斡旋で南アフリカ、レソト、エスワティニ王国の教育現場を3週間訪問。途上国の教育課題と可能性を目の当たりにし、自分の選んだ道により真剣に取り組む決意をする。

TURNING POINT 4

2022年 冬

訪れたアフリカ地域の遠隔教育に関する卒業論文を英語で作成。初めての海外教育機関へのアンケート調査と英語を使った執筆で困難も多くあったが、英国大学院進学への大きな自信につながった。

現在

英国大学院で国際教育と開発を専攻。学部時代に学んだ日本の教育システムに関する知識をベースに国際的な教育を通じた開発の基礎を習得する。同時にアルバイトとして開発コンサルタント会社でアフリカの小学校に向けた国定教科書をつくるプロジェクトに参加中。来年4月より世界中に教育を届けることをミッションに掲げる教材開発会社で勤務予定。

PROFILE

参加時期：2019年度・2年生

プログラム：難民支援 (Will2Live Cinema)

グローバルからはじまった、アフリカへの道



きっかけ

小さな頃から、自分より大変な環境にいる人たちに何かしたいという思いがなぜかずっとありました。そして大学に入ったらアフリカに行こう！と思い、グローバル説明会へ。でも、そこから調べたり先生と話すうちに、自分がアフリカ＝貧困、発展途上国というステレオタイプを持っていたことに気付きます。「そうか、なんか私急にアフリカに行つて、よーしみんなを助けるぞ！って思ってたけど、それめっちゃ傲慢だな... てか私何もできないし...」でもじゃあ、現地の人はどんな暮らしをしてるんだろう？何を考えてるんだろう？よしとてりあえず行ってみよう！と、ウガンダに行くことを決めたのがはじまりです。

参加

私は大学1年の春に、ウガンダの幼稚園で先生のアシスタントボランティアを1か月間しました。初めてのアフリカは、何もかも全てが新鮮で本当に面白かったです。私がボランティアをしていた幼稚園は、今思えばどちらかというと裕福な家の子どもが通う幼稚園で、私が想像していたような貧困とは少し違いました。

ただそれと同時に、明日本当に食べるものがなかったり、病気の子どもをただただ抱えるしかできないお母さんだったり、どうしようもないほど過酷な状況に生きる人たちも目の当たりにしました。そうしたことから、アフリカがただ貧困だというのは違うこと、でも逆に笑顔が溢れて幸せな国だけでもないことを痛感し、現地でのリアルを知る重要さを学びました。あとは単純に、あれ、私、アフリカのパワフルでおおらかな空気感すごく好きかもしれない！というのを発見しました。

参加後

帰国直後（というか渡航中）にコロナが流行り出します。ウガンダから帰ってきてやる気に満ち溢れていた私は悔しさを噛み締めながら、日本でインターンやボランティアをしていました。そして2022年の2月から休学し、半年間南アフリカへ語学留学とインターンをしました。比較的発展していながらも人種と格差の問題が渦巻く南アフリカでの日々はとても刺激的でした。その後は様々な国でNGOを訪れたりボランティアをして、色んな世界、人、価値観に出会い、自分の視界がぐわっと広がった1年でした。

これも全て、初めてのウガンダで「知らないで決めつけたり、自分と違うから遠ざけるということが、気付かない間に誰かを傷つけているかもしれない」と思ったことがきっかけです。今は、国際協力というものを一生の仕事にすべく奮闘しております！

北川野々子さん

PROFILE

参加時期：2019年度・1年生

プログラム：ICYE ジャパン・ウガンダ

TURNING POINT 1

1年 春 グローバルでウガンダに渡航 ウガンダの幼稚園で1か月、先生のアシスタントをしながら暮らしました。見慣れない景色や食べ物、自分の持っていない価値観にたくさん出会い、面白くて忘れられない時間になりました。

TURNING POINT 2

3年 春 南アフリカで語学留学とインターン、世界一周 南アフリカケープタウンで半年過ごしたあと、色んな国や地域の人々のリアルを聞いて見て話したくて、アフリカからヨーロッパ、南米と気付いたら世界一周をしていました...。どの場所でもやっぱり自分の知らない世界があって、帰ってきた後は少し世界への解像度が上がった気がします。

TURNING POINT 3

4年 春～ 帰国後、日本のNGO

今はアフリカの国で活動する2つのNGOでどちらもパートとして働いています。1つはケニアやソマリアでのテロ・紛争解決、1つはシエラレオネでの教育支援をおこなっており、どちらも本当に真摯に現地の人々に向き合っている団体で、非常にやりがいがあります。

TURNING POINT 4

4年 卒論研究でウガンダ

卒論ではウガンダの若者を対象にし、音楽活動によるエンパワメントというテーマで研究をおこなっています。今までやってきたこととこれからやりたいことを集約したような研究なので、最後までやりぬこうと思います。

卒業後 2024年秋から、青年海外協力隊でウガンダへ

なんとこれで4回目のウガンダで、もう腐れ縁のような国なのですが(笑)、こうしてグローバルで初めて訪れた国にずっと関わられるのは本当に嬉しいです。2年かけてウガンダに恩返しできればと思います！



アフリカ地域を訪れたときに道端で食べたご飯



南アフリカの伝統的な料理バニーチャウ



お祭りのときのポップ（とうもろこしの粉）



よく遊びにきていた子どもたちと



生活に必要な水汲みのお手伝い



東中野にあるポレポレという映画館を訪れたとき



牛久入管に訪問したときに建物の前で



ウガンダでのボランティア認定書を現地の方々と



子どもたちに囲まれて撮った一枚



2ショット



高田馬場のミャンマーコミュニティを訪れたとき



難民支援ボランティア
大学祭：Meal for Refugees



難民映画祭：セッションの進行



レソトの村の子どもたちと一緒に歩いて2時間かけて学校に行くときの写真



タンザニアで子どもたちにアルファベットの書き方を教えるボランティア



セブ島の子どもたちとスポーツ



「グローバルボランティア」の10年を振り返って

大学院国際学術研究院
准教授 佐々木綾子

「グローバルボランティア」（略称「グロボラ」）は、2012年に千葉大学が採択された「グローバル人材育成推進事業」の一環として、2013年より筆者が担当してきた授業科目である。「グローバル人材育成推進事業」とは、若い世代の「内向き志向」を克服して国際的な産業競争力の向上等を図るため、グローバルな舞台で挑戦的に活躍できる人材を育成する大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する国の補助金事業である¹。千葉大学では本事業を「skipwiseプログラム」²として展開し、なかでもグロボラは、実社会において創出された学びの機会を通して、学生の探求的挑戦を応援するプログラムとして開講することを期待されてきた。

もともと筆者は米国での修士課程修了後、日本で博士後期課程へ入学するまでに社会福祉法人やNPO法人での社会人経験があり、ワークキャンプやスタディーツアー、海外ボランティアの派遣・受入事業を実施する団体とのつながりを持っていた。また実際に、社会人経験のなかで事前オリエンテーションを実施し、現地担当者とのやり取りを通して具体的なプログラムをつくり、参加者を派遣し、終了後に振り返りを実施するという一連の流れを「業務」として行っていた。だが千葉大学においては、これまで海外派遣といえば「欧米」が想定されてきたのであり、生活インフラも交通インフラも「欧米」のように整備されていない、英語すら通じない場所へ学生を送ろうとするグロボラは、冷たい視線を向けられることも多かった。ただ筆者には、日本政府の視点から提唱される「国際的な産業競争力の向上」よりも「地球全体の平和で楽しい未来」を担う若者を育成したいとの想いがあった。石橋を叩いて壊しちゃうくらいの慎重さを持つ学生も多い千葉大学であるが、数年後には全学年、全学部からとても優秀で独自の想いを持つ面白い学生たちが履修するようになり、特に海外プログラムでは「アフリカ熱」を高めながら、横のつながり、縦の繋がりができるようになっていった。

2017年には、国内プログラムにも大きな進展があった。グロボラ元履修生でフィンランドのアフガニスタン難民が通うフォルケホイスコーレで長期ボランティアをするために休学していた教育学部の学生の帰国と、同年度入学の国際教養学部や文学部の学生、当時2、3年生だった学生たちの難民への大きな関心が共鳴し、国連UNHCR協会の「学校パートナーズ」として千葉大学初の「難民映画祭」を開催することになったのである。その後、本映画祭に関わった学生たちの数名が学生団体FELicetoを結成し、いくつかの国内プログラムが協働して学内の複数名の教員の協力を得つつ、図書館の展示スペースを使った移民難民に関するポスターの展示会や難民支援のための衣服リサイクル活動、学生主催の講演会の開催、難民の故郷の料理をつくるイベントなどを実現させ、千葉大祭でブースを出して様々な国の料理やフェアトレード商品を販売するようになった。

ああ、あれから10年も経ったのか。多忙のあまり、そし

てコロナ禍で履修を10名程度に制限した年もあったが、この10年間の履修学生（単位取得者）は268名に達している。フェードアウトした学生もリポートして履修した学生も、みんな個性豊かで多才であり、グロボラでつかんだ「きっかけ」から多様な花を咲かせてみせてくれた。マalariaになっちゃった人、腹痛に苦しんだ人、進路変えちゃった人。大学院留学した人、学長賞もらった人、学生7年やった人。「学生の探求的挑戦を応援するプログラム」として開講したグロボラは、10年を経て268名それぞれの人生の一部となり、また社会にとっての貴重な人財を築いてきた。国家公務員、NPO職員、教員、医師、看護師、建築士。大企業やベンチャー企業勤務の会社員もいる。海外で働いている人も、家業を継いだ人も、起業した人も、学生に戻った人や子育てしてる人もいるだろう。グロボラでの活動や経験は、それ単体では具体的な社会課題を解決できず、必ずしもきらびやかなキャリアにはつながらなかったかもしれないが、一人ひとりが活動を通して得られた「気づき」や自己省察を伴う「他者理解」が自己変容をもたらし、その集積として社会変容をももたらす力を生み出してきたといえるだろう。

「先生には是非10年の振り返りを書いてほしいです！」とTAのBさんに熱く依頼され、ようやく自分の研究に専念できるはずだった(?) サバティカル研修中に、筆者はこうして本原稿を書いている。そう、学生の皆さんには大変申し訳ないが、2024年度、グロボラは国内プログラムも海外プログラムも非開講となる。ただ授業がなくても、これまでグロボラに協力してくれた国内外の団体がなくなってしまうわけではないし、交流してきた人々の生活は続いている。単位は出ないけれども、報告書内に掲載されている協力団体に自分で連絡をとって、活動に参加していただいても構わない。授業自体は2025年4月以降、パワーアップして帰ってくる予定なので首を長くして待っていてほしい。

「グロボラの10年」をともに築き上げてくれた学生たち。いつも世界各国のお土産を買ってきてくれて、なぜか研究室で号泣し、知らぬ間につながりあってる学生たち。毎年のように顔を見たかと思えば、休学して世界一周していたり、卒業式の日になんげ挨拶にきてくれたりする学生たち。今年度、筆者のいないなかで本報告書をまとめてくれているBさん、Kさん、Oさん、本当にありがとう。

世界中で活躍する卒業生たちを訪ね歩く。そんな退職後の生活を夢みて、今後もグロボラを続けていきたい。

¹ 詳細は、文部科学省の以下のサイトを参照のこと。
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1326068.htm
(2023/12/22)

² 詳細は、以下の千葉大学 skipwise プログラムのサイトを参照のこと。
<https://www.chiba-u.ac.jp/skipwise/> (2023/12/22)

私とグローバル・ボランティア

2017年度教育学部卒業 緒方 彩夏さん



1 2014～2017年（千葉大学在学）
（写真は2016年当時）
教育学部にて小学校教育と英語教育を学ぶ



2 2016年夏～2018年春
グローバルボランティアの一環で成田国際空港でご案内ボランティアをする



3 大学卒業後2018年～5年間で成田国際空港でグランドスタッフとして働く



4 現在
青年海外協力隊としてエジプトの学校で体育と特活の推進に携わる

国際教養学部3年 岡本 久平さん



1 高校3年生 春
偶然見かけたグロボラに関する新聞記事によって、千葉大学への入学を決める



2 大学1～3年生
日本にあるエスニックコミュニティなどの訪問を通じて、理解を深める



3 大学2年生 冬
念願の対面での難民映画祭の開催をする



4 大学3年生 夏
グロボラの一環で、バングラデシュへのツアーに参加。大学に入って初めての海外渡航

融合理工学府1年 坂東 和真さん



1 2019年
夏ウガンダの孤児院でボランティア



2 2022年7月
千葉大プレス掲載 vol.60掲載



3 2022年10月
日本整形外科学会にて発表



4 2023年3月
課外活動等に対する学長表彰として表彰



座談会詳細は二次元コードからご覧ください
<https://www.youtube.com/watch?v=vpT7luzSKkA>



橋本
法政経学部 4年 ベトナム

■ボランティアを通じて得たこと

私はベトナムで障がいを持つ子どもたちが通う学校のボランティア活動に約1ヶ月間参加してきました。平日の午前中は自分の担当のクラスで子どもと一緒に勉強をして、午後は一緒に体育館で運動をしました。休日は他国からのボランティアの人たちと旅行に行き、ベトナムの文化や自然を肌で感じました！ボランティアでは、子どもたちはとても温かく迎え入れてくれ、人の温かみを感じ、言語はツールでしかなく、オープンなマインドが重要であると実感できました！また、障がいについて事前に詳しく勉強しておくことで、より良い対応ができたと感じました。プログラムを通じて、教育や障がいについて深く勉強し、子どもと関わっていきたくと目標ができました！



橋本



岡本

■ボランティアを通じて得たこと

私は、バングラデシュの活動に参加してきました。首都ダッカのパートとアカデミーという子どもたちが過ごす農村部パートがありました。主に子どもたちとスポーツや日本の遊びを通じて交流を深めたり、街の視察をしたりして街や村の雰囲気を肌で感じることができました！国が成長しているので、それを支える人々が持つ情熱や温かさを直接感じる場面も多く私たちも同じ世代として負けていられないと刺激を受けたことを覚えています！後悔しているのは、言語や国の歴史など事前に勉強しておくべきだったと思います。8月15日は日本・バングラデシュ両国の記念日だったので、もう少し歴史などを勉強していけば若者として伝えることができたこともあったと思いました。



冬至

■ボランティアを通じて得たこと

自分の目で見たこと、耳で聞いたこと、肌で感じたことは、何にも変えがたく、貴重な経験であることを実感しました。私はバングラデシュに行ってきたのですが、訪れる前と後の印象は全く違います。今の自分の能力を周りの環境のせいにならず、大きな夢や目標を持って強く生きている人々、子供たちに胸を打たれました。アカデミーというストリートチルドレンの保護施設では明るく人懐こい子供たちと食事を取ったり遊んだりして交流を深めました。とっても良い思い出になりましたし、遠く離れたところで、置かれた環境の中で前向きに生きている子たちがいると思うと、自分もどんな困難にも立ち向かえる気がしました。

冬至
国際教養学部 2年 バングラデシュ



岡本
国際教養学部 3年 バングラデシュ



村井
工学部 3年 レソト王国

■参加して得たこと&感じたこと

私はレソト王国で、都市部から離れた山岳にある村と、聾学校で教育ボランティアを約1ヶ月間行って来ました。その村の子どもたちが十分な教育機会が得られるよう、支援団体の活動の一環として、村の近くに新設された教育センターで使える用具や遊具などを子どもたちと作ったり、実験教室を開いたりして、村の人たちと言葉の壁を越えた交流をしました。また、出産祝いに関連した儀式に参加したり、ヤギを捌いていただくなど、非日常かつ刺激的な体験をしたことは記憶に強く残ってます。このプログラムを通して、私たちの参加に留まらず、支援団体との継続的な協力が必要なことを感じました。興味のある方は是非レソトに行き、ボランティアの輪を広げてください！



村井



坂東
融合理工学府 1年 TA



坂東

■座談会を通して伝えたいこと

2019年夏、ウガンダの孤児院でボランティアを行いました。孤児院の子どもたちや地元の方々との過ごしたこの経験は、今後の人生の重要な指針となっています。帰国後、毎年のグローバルボランティアでは、SAやTAとして授業や冊子作りに携わってきました。履修生からは、充実感や新たな発見の声が多く聞かれますが、一方で、「もっとできたことがあったかも」と悔しがめる声もあります。グローバルボランティアは、自分の限界に挑戦し、世界観を広げる素晴らしい機会です。ぜひこのチャンスを生かし、自分の可能性を広げてみてください！

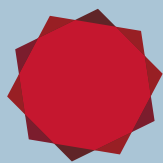
編集後記

新型コロナウイルスも収束の兆しを見せ、海外3か国へと学生が旅立ち、従来のグローバルボランティアの姿が完全に戻ってきたと言える1年でした。私自身もこの3年間、履修生として、SAとしてオンラインでの活動に始まり、思うように活動ができないという状況を経験しながらも、少しずつ「対面」での活動が増えていくことを肌で実感しており、今年の夏には念願の海外プログラムへの参加を果たしました。報告書からも分かるように新たなフィールドでの活動も始まりグロボラは、より大きく広がっていくことが期待されます。

佐々木先生からのコメントにもあります通り、来年度は残念ながら授業自体は開講されません。ただ、授業を通じた活動だけではなく、皆さんの身の回りや学外にも目を向けてみればボランティアの機会は数多く見つけることができます。自分ができることは何か、なぜ必要とされているのかについてぜひ考えてみてください。そうして、蓄えた力をグロボラが再開したとき、存分に発揮してもらえたら嬉しく思います。

最後に、履修生の皆さん、本活動報告書の企画作成に携わってくださった皆さん、そして何より、プログラムの企画から実施まで大変お忙しい中でも、学生に寄り添い、温かいサポートをしてくださった佐々木綾子先生、本当にありがとうございました。





CHIBA
UNIVERSITY

